

# 発掘! さわめびと



結成25年になる「佐久室内オーケストラ」の中心メンバーとして活動を続けるヴァイオリニスト。



## 新津 裕子 さん

1970年小海町生まれ。4歳でヴァイオリンのレッスンを始め、高校卒業まで通う。短大卒業後、地元の銀行に就職。社会人2年目に「佐久室内オーケストラ」に参加。7年ほど前から「音楽室内合奏団」にも加わり、現在二つのオーケストラに所属。佐久穂町には94年、結婚を機に移住。現在は、佐久市内にある公的機関に勤めながら音楽活動を続けている。大学と短大に通う2人の娘さんがいるが、今はご主人と2人暮らし。

「練習で一〇〇%弾けても、本番では六〇%くらいしか出来ないのです。練習で二一〇〜二三〇%までできればいいなというのが私の理想。練習は裏切らないですから」

## 佐

久室内オーケストラ（略称：佐久オケ）で主にファーストヴァイオリンを弾く新津裕子さん。今年結成二十五周年になる佐久オケの草創期のメンバーの一人でもある。

「練習は夜中、相撲の再放送が流れるなかでやったり（笑）。もちろん見えてはいませんけど。みんなとやって出来なかったところに×点をつけておいて、そこを重点的に練習するようにしています。練習？ 毎日じゃありません」

ただ、切羽詰まることもたまにあるという。

「エキストラで呼んでいただきたい、曲が弾けないと、朝四時まで練習して、七時まで寝て、それから仕事という生活がひと月くらい続くこともありました」

四歳のとき、母親に連れられて、当時白田町にあった「スズキ・メソッド 坂本教室」に通い始めた。

「私の母は田園調布のそばで育ったんですけど、周囲にピアノやヴァイオリンを習う子どもがたくさんいて憧れていたらしいんですね。で、いざれ自分の子どもには、ピアノかヴァイオリンを習わせようと思っていたらしいです」

他に、三味線、ピアノ、油絵、お茶なども習ったが、結局、残ったのがヴァイオリンだった。とあって、ヴァイオリンが好きだったわけではなかった。

「とにかく練習嫌いで、学校から帰ると母の前で妹、私の順で練習するんですけど、妹の練習中にそっと山に逃げたりしたこともありました（笑）」

最初の転機は小六のとき。先

生が替わり、レッスン内容もそれまでの「楽しいヴァイオリン」から「音を追求するヴァイオリン」に変わった。

「先生に教えられる通りにできないのが悔しくて、何度も泣きました。同じ教室の生徒もみんな泣いていたと思います」

後に二人の娘さんも同じ先生のレッスンを受けるが、二人のヴァイオリンには、いつも塩の跡が付いていたという。

「だから、私のヴァイオリンにも、涙の乾いた塩の跡が付いていたと思います（笑）」

週一回のレッスンは高校卒業まで続き、この間、ヴァイオリンも16、10、8……と、大きくなくなっていった。そして中学のときに買ってもらった七代目の78のヴァイオリンを、今も愛用している。

短大時代、バンド活動に熱中し、ヴァイオリンからやや遠ざかっていた裕子さんに二度目の転機が訪れる。

社会人二年目のこと。小池公夫さん（現・佐久オケ団長）と和恵さん夫妻に、「オーケストラを立ち上げたんですけど、一緒にやりませんか？」と声をかけられたのだ。短大時代に妹さんとやった二重奏を見ていたのだという。「ハイ（練習に）伺わせていただきます」と即答。以来二十五年、ヴァイオリンと向き合う日々が続いている。

「練習で一〇〇%弾けても、本番では六〇%くらいしか出来ないのです。練習で二一〇〜二三〇%までできればいいなというのが私の理想。練習は裏切らないですから」

去年の大晦日、うれしいことがあった。帰省した娘さん二人とご主人（チェロ）と四人で初めて「カノン」を演奏したのだ。「出来はめっちゃめっちゃだったけど、やったー！ 通して合奏できたのね！ という感じでした。我が家の行事にしていきたいなと思っています」

いまは休んでいるが、絵本の読み聞かせの演奏も再開したいという。

「ここまでヴァイオリンを続けてこられたのも、子どもが小さいとき、『練習に』行っておいで」と言ってくれた主人や主人の母のおかげだと思っています。ヴァイオリンを習わせてくれた母にも本当に感謝しています」



「ヴァイオリンは自分を追い立てるものでもあり、ヴァイオリンを通じて沢山のお友達もできました」（左が裕子さん＝佐久市「なんだ館」）